

# 多摩の開発とめかい編み

谷本 寿男 ● 恵泉女学園大学人間社会学部教授



## 東京都多摩市

多摩市は、面積二一・〇二平方キロメートル、人口一四万六二〇六人（二〇一三年五月一日推計）、東京都の西部の丘陵地に位置するこぢんまりとした住宅都市である。

丘陵地と里山という視点から多摩の歴史を振り返ってみると、まずこの地域では、動植物の狩猟・採取に依存した縄文時代の遺跡や痕跡がニュータウン開発で多数発見されており、それらは多摩センター駅近くの東京都立埋蔵文化財調査センター遺跡庭園「縄文の村」に所蔵展示され、一般に開放されている。奈良時代には、「赤駒を山野に放し 捕りかにて 多摩の横山 徒歩ゆか遣らむ」（万葉集巻二十卷・四四一七）と詠まれたように、馬を里山に放牧するというのどかな風景であったことが想像される。

多摩市のほぼ中央を通称鎌倉街道（都道一八号線ほか）が南北に貫いている。街道名の由来は、鎌倉時代に鎌倉と各地を結んだ鎌倉道にある。多摩地域には、その古道や間道がいくつも残っており、その一部は歩きたくなく道五百選の「多摩丘陵・よこやまのみち」として整備され、多くのハイカーに親しまれ

ている。

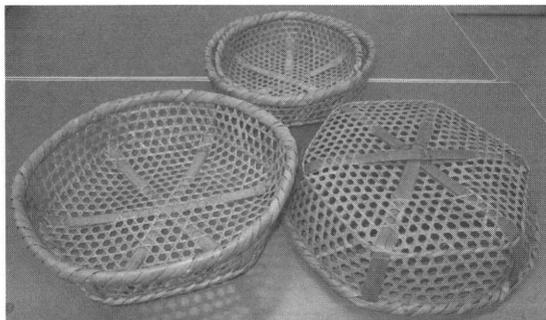
古くは弥生時代から昭和中期までは、乞<sup>こ</sup>田川<sup>たがわ</sup>や大栗川、多摩川に近接する地区では、稲作が主要な生業であった。稲作とともに、この地域に広く存在していた里山を活用する養蚕や薪炭作りも一大産業であった。

一九七一年から入居が始まったニュータウン開発の結果、多摩地域の土地利用や景観が大きく変貌した。この開発は日本最大規模で、稲城・多摩・八王子・町田の四市にまたがる多摩丘陵の三千ヘクタールを対象に、人口三十四万人規模を目標とした。

多摩市では、歩車分離が進められ、教育や市民の憩い・趣味教養の場である文化施設が整備されている。道路際や公園に新しく植えられた木々は、残された里山とともに、緑豊かな市街地を形成している。多摩市の南縁の丘陵部を走る尾根幹線（都道一五六号線）沿いに、多摩大学、国士館大学多摩キャンパス、恵泉女学園大学、東京医療学院大学、そして大妻女子大学（社会情報学部）が点在し、多摩市は小規模な学園都市とも言える。

恵泉女学園大学は、学生数は院生を含めて

めかい箆（東寺方・伊野澄氏製作）



千六百人余りの小規模な大学であるが、多摩市などの市民団体と多種多様な協学活動を活発に行っている。この活動の一つに、多摩地域の伝統手仕事である「めかい」編みの継承に関する取り組みがある。

江戸時代の後期に始められたと言われる「めかい」（目籠、メケイとも呼ばれる）は、東日本の里山に自生するシノダケを原料とする籠や箆で、この生産はこの地域の小規模農家にとっては農閑期の貴重な収入源であり、主として女性たちによって継承されてきた。最盛期の正から戦後の一九六〇年

代にかけては、魚介類の容器、料亭での盛器、一般家庭での水切り器などに使われ、都内のみならず、関東一円や東北地方にまで販路を広げていた。

しかし、高度経済成長期が始まると、これらの籠や箆は金属やプラスチックの製品に代替され、ニュータウン開発に伴う就業構造も変容し、作り手の「めかい」離れが顕著になった。さらには、里山の他用途への転

用、その後の放置の結果、良質なシノダケの確保も困難となり、「めかい」編みは衰退した。

一九九〇年代に、東京都や多摩市によって「めかい」製品や資料の収集・整理が行われたが、「めかい」編みをどのように継承していくかが大きな課題として残った。中でも、地元

の作り手の高齢化の進展はより深刻な問題である。



めかい編み講習会（恵泉女学園大学南野キャンパス）

そこで、恵泉女学園大学の教員・学生と多摩市民の有志による研究会が発足し、二〇〇九年度から三カ年間にわたって文献の分析や作り手への聞き取り調査を進め、継承に向けた報告書をとりまとめ、多摩市及び恵泉女学園大学において「めかい」講習会を開催するまでにこぎつけた。これらの講習会には、「めかい」編みに興味がある多摩市民のみならず市外からも多数の受講者の参加を得ている。

# 新しい工学の教育を目指す

井口 弘和 ● 中京大学工学部長

## 一 情報技術の発展と展開

本学は十一学部を有する総合大学として、二〇一四年には開学六十周年を迎える。その歴史の中で、本学の理系学部としては今年度で二十四年目を迎える。

開設当時の時代背景には、一九七七年のApple IIの販売でパーソナルコンピュータが人気を博し、それまでの電子計算機技術が研究者のための特殊な機器であったコンピュータから家庭用の電気製品へと変貌を遂げ、ネットワークシステムが手軽なものとして注目されるようになっていた時代があった。このような背景のもとで、本学においても新たな教育要請としてコンピュータ時代へ対応が求められ、一九九〇年に本学における初めての理系学部である情報科学部が発足した。

情報技術はこの二十年間に社会に浸透し、十分にその利便性を享受することができるようになったが、生産技術においては、その効果は効率化が主体で直接的な技術革新には及ばない状況にあった。その後の新世紀を迎えるに至って、リーマン・ショック後の長引くデフレ不況から、産業界では技術力の停滞感が危惧されるようになった。つまり、日本が得意とする高性能・高機能・高品質のものづくりが開発途上国による価格競争で苦戦するようになり、価格以外の価値を得るために、他を圧倒してまねのできない技術力が希求されるようになった。そして、その閉塞状況を打破する手がかりの一つとして、各種の国家戦略プランにも記載されているように、技術融合型の新技術の開発が重視されている。

本学の位置する中京地区は、本邦における産業の中心地であることから、次代の原資となる若い技術者を育てるための教育においても、これらの時代の要請を看過することはでき



ない。しかし、教育分野でも産業界と同様に教育環境の閉塞感が増大してきて、二〇〇九年には高校生の大学進学率は五〇%を超えて、少子化の影響が顕在化してきていることから、入学者を獲得する努力が必要となっている。私立大学においては、従来は増加する進学者の受皿の役割を担ってきたが、その役割も量から質への転換期を迎えている。本学においても、これらの環境の変化に対応するべく情報技術の展開を想定しながら、二〇〇八年には情報科学部を情報理工学部へ改組したが、さらなる発展のシナリオが必要となっていた。

## 二 工学部の狙いと特色

時代の変化に沿って学生と企業のニーズに対応するために、本学においては、情報技術からの展開を図ることとした。つまり、これまで培ってきた情報技術の教育力を他の技術と融合しやすくするために、情報理工学部からの改組を行った。その支点は、近未来の基盤技術となる情報技術を教育基盤として位置づけて、その力点は、企業での応用力の基盤となる基礎力の強化と、自主的に問題解決に取り組む意欲の養成とされている。

情報は目に見えないバーチャルな世界を対象としているが、

ものづくりは現物としてのリアルな世界を対象としていることから、両者をつなぐために、目で見ながら手で確かめることのできる体験型教育の充実と基礎学力の保証を教育の特徴として、二〇一三年四月に最先端の「ものづくり」と「IT」の教育研究を融合した新たな理系学部である新・工学部を開設した。

教育の特徴は、「対面教育」「体験型カリキュラム」「キャリア支援」の三つを特色としている。昨今、教育改革がさまざまな試みが行われているが、いずれも少子化と全入時代への対応として、旧態依然としている教育方法を改善することにより、大学の活性化を図るものとして期待されている。ただし、教育の本質は、人と人との交わりにより子どもたちを育てることであるので、本学部では、一学科を八十名程度のコンパクトなサイズで、前記の三つの特色をもたせた密度の高い教育を目指している。

学科の構成は、以下の四学科体制である。

- ・ものづくり技術を総合的に学ぶ「機械システム工学科」
- ・電気工学や電子工学に加えて半導体、情報通信分野も学ぶ「電気電子工学科」

- ・情報システムの設計、実装、運用を学ぶ「情報工学科」
- ・人と機械の対話を円滑にするメディア技術を学ぶ「メデ

情報技術とこれにまたがる総合的な教育研究を通じて、それぞれの分野における専門的な知識や技術を身につけるとともに、幅広く深い教養と総合的判断力、豊かな人間性を兼ね備えた有為な人材の養成を行う。

### 三 工学科の特徴と目標

機械システム工学科では、機械システムの設計に必要な力学や人間工学などの各分野の基礎知識の理解のもとに、機械システム設計の基本原理と各種機械要素の機能や原理、材料選択や製造加工などの設計や製作のための基本的な知識と技術を学び、さらに製品の性能や安全・快適性についての判断や評価ができる基礎的な知識を修得する。従来の一つの機械の設計・製作を可能にすることに限定することなく、情報技術との組み合わせで総合的にシステム設計を考えることのできる能力を養うことを目標としている。

電気電子工学科では、電気回路及び電磁気学に関する基礎的な知識を修得したうえで、電気系科目では電気機器及び電力ネットワークの基礎知識を、電子系科目では電子デバイス、集積回路など半導体の基礎知識を、情報系科目では組み込み

システムや画像信号処理の基礎知識を、通信系科目では通信システム、無線通信の基礎知識を修得する。従来の回路設計が主となる制御系電気機器の製造に限定することなく、生産分野におけるメカトロニクス機器から携帯電話などの情報端末に至る現代の電子機器一般の設計・製造を可能にする能力を養うことを目標としている。

情報工学科では、情報システムの基本構成と基本要素について理解し、プログラミングとソフトウェア開発、情報処理環境の機能と運用、情報処理技法の設計と評価、情報と計算に関する形式的記述と論理的思考、ハードウェアやソフトウェアの設計と製作、分散システムの設計や開発に関する基礎知識を修得する。現在のコンピュータシステムの開発や運用にとどまらず、新たな計算システムの考案や情報制御や管理も可能にする能力を養うことを目標としている。

メディア工学科では、情報技術の基礎的な知識と技能を修得し、ネットワークの構築と運用やアプリケーションソフトの開発、コンテンツ制作のための基盤能力とデザイン能力、メディア情報処理システムの設計や開発などのメディアテクノロジとメディアデザインに関する基礎知識と基本技術を修得する。従来の情報工学の応用という枠を越えて、アートとエンジニアを融合したプロダクトデザインが可能な能力を養

うことを目標としている。

#### 四 今後の期待と役割

大学の未来は、淘汰の時代を迎えることになるのは衆目の一致するところで、最近の数量規制の動きなどを見れば前途多難である。全入時代を迎えたわが国の大学は、二〇一〇年度に赤字経営の大学はすでに三九・二％になっている。一方で生産年齢人口は、二〇三〇年には二〇〇〇年の二〇％減となる内閣府の予測が出されている。このことから今後の大学における工学部の役割は、幅広い分野におけるエンジニア不足に 대응することのできる人材育成がミッションとなることは明白である。

前世紀における大学卒エンジニアが希少な時代には、一つの専門技術のみの能力に秀でた、いわゆる「I型エンジニア」が重宝されたが、今後の産業界においては、他分野の社員との協働による複合型開発が生き残りの方策として必要となるため、複数の専門性と幅広い視野で思考できる能力をもつ「π型エンジニア」が重要となる。同時に、工学教育もそれに沿った内容が求められるであろう。近ごろは教育改革の潮流があらゆる部門で渦を巻き、FD教育改革の流れが大学の

質向上に欠かせない活動と位置づけられてきている。リベラル・アーツが広い視野をもつための教養カリキュラムとする位置づけが変貌しつつある現状では、教育内容や方法については古典的な教育法にとどまらない新たな手法が必要となる。特に複眼的な思考力を養うためには、専門の基礎科目においてもさまざまな専門分野とのつながりを考慮し、専門科目も基礎科目との接続を意識した視座を与える教育法が重要になるであろう。

さらに、共学の環境をもつ総合大学においては、そのキャンパス・メリットを活用したオリジナルな学際的カリキュラムへの展開を進めることにより、多様性のある新しい工学教育に対する社会の期待を高めて、工学部発展の原動力とすることが必要となるであろう。そして、単なる製品開発のための機能設計が専門のエンジニアばかりではなく、人間中心設計のできる企画マネジメント活動を生業とするクリエイティブエンジニアから営業的活動を伴うサービスエンジニアに至る色彩豊かな人材を輩出することにより、社会ニーズとの一体感のある教育機関としての特徴が明確となるであろう。本学においても日本のものづくりの中心地にある大学として、これらのニーズに応えることのできるように新しい工学の教育環境を整えていきたい。

衛藤 卓也 ●福岡大学学長

# 日本の高度経済成長との相似性

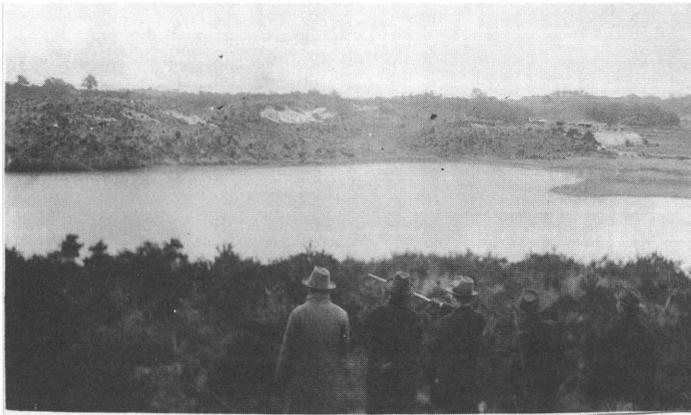
## 一 紹介

福岡大学は本年五月、人口百五十万人を超えた福岡市の南西部（城南区七隈<sup>ななぐま</sup>）に位置する総合大学である。現在、九つの学部、十の大学院研究科、二つの大病院、二つの附属高等学校、一つの附属中学校を擁する九州で最大規模の大学である。

九つの学部は、文系四学部（人文学部、法学部、経済学部、商学部〔夜間の第二部を併設〕）、及び理系五学部（理学部、工学部、医学部、薬学部、スポーツ科学部）から構成される。大学院は、九つの学部に対応して設置されているが、十番目は法科大学院である。二つの大病院は、一つは本学七隈地区に、もう一つは筑紫野市に立地している。附属大濠高等学校・附属大濠中学校は福岡市の大濠公園に面した所に、もう一つの附属若葉高等学校も大濠公園に近

い北側の所に立地している。これまで男子校であった大濠高校と大濠中学校は、つい最近、ともに男女共学体制となり、大濠中学校は中高一貫教育体制をとっている。後者の若葉高校は、本学と旧九州女子高等学校との合併により名称を改め、平成二十二（二〇一〇）年、新たにスタートを切った女子高校である。

本学大学部門は、福岡市城南区の七隈地区に集積立地しており、一つの大規模なアカデミック・クラスタを形成している。学生数約二万人、高校・中学校の生徒数約三千四百人、教職員数（教員、事務職員、看護師など）約三千九百人から構成されている。平成十七（二〇〇五）年二月には、地下鉄「七隈線」が開通し、「福大前駅」が設置され、本学へのアクセスは飛躍的に向上した。これに伴い、本学の正門は駅の近くに新設され、旧正門は東門と呼ばれるようになった。



## 二 史的鳥瞰——三つの発展段階

本学がたどってきた歴史的な歩みを三つの段階に区分して概観することにする。

### (一) 初期発展期

本学は、昭和九(一九三四年)、福岡高等商業学校、いわゆる「高商」として創設され、今日まで約八十年の歴史を刻んできた。昭和十年代の戦争・戦火の時代の終わりごろ、高商創立十年後になる昭和十九(一九四四年)、高商を母体に「九州経済専門学校」を設立、その二年後の昭和

二十一(一九四六年)年には、校名を「福岡経済専門学校」と改称した。昭和二十(一九四五)年に終戦を迎えた翌年になる。さらに、校名改称の三年後の昭和二十四(一九四九年)には大学として昇格、新制大学として「福岡商科大学」となった。当時、戦争で焼失した図書館を復旧するため、学生たちによる戦災図書復旧運動が展開され、大学昇格への条件をクリアするのに大きく貢献した。また、大学昇格のため、近隣の専門学校との合併も行われ、昇格の条件を整えたのである。戦後の貧困と復興の時期に大学として生まれ変わったことになる。商学部商学科の一学科体制であった福岡商科大学には、昭和二十八(一九五三年)、商学部第二部が増設され、第二部は現在でも本学唯一の夜間部として生き続けている。

商科大学から七年後の昭和三十一年(一九五六年)には、大学名が「福岡大学」と改称されたが、高商創設からの約二十年間を振り返ってみると、本学は、専門学校と専門大学の時代であり、いずれも単科、つまり商学系の教育機関であったことがわかる。

この厳しい戦中・戦後の二十年間を「初期発展期」として位置づけることにする。

### (二) 急速発展期

福岡商科大学は、昭和三十一年(一九五六年)に「福岡大学」と名称を変更した。福岡大学初代学長は、いまむらたもつ今村有教授(東京商

## 今村有福岡大学初代学長



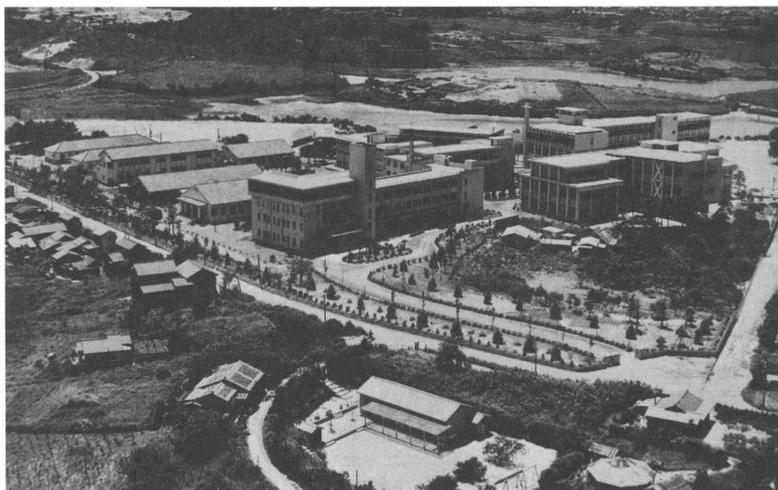
科大学〔現・一橋大学〕卒〕である。

名称の改称は、本学にとって非常に重要な歴史的転機を意味するものであった。大きなパラダイム転換が起きたと言った。というのも、初めて学部体制が一つから二つになった、つまり複数になったということの意味するからである。

それまでは一つの学部体制（商学部）であったが、この年に初めて複数の学部、すなわち商学部と法経学部（法学科と経済学科）の二学部体制となったのである。

この昭和三十一年という年は、『経済白書』で「もはや戦後ではない」とうたわれた年であり、日本の高度経済成長

## 福岡大学全景 昭和35(1960)年



の幕開けの年にあたる。日本経済はおおむね戦前の水準に回復し、それを凌駕するようになっていた。であり、高い経済成長が見込まれる条件・状況が生まれていたのである。

昭和三十一年に福岡大学が二学

部体制となった三年後、つまり昭和三十四（一九五九）年に法経学部が分離され、法学部と経済学部の二つの学部が誕生した。また、その翌年の昭和三十五（一九六〇）年に薬学部、

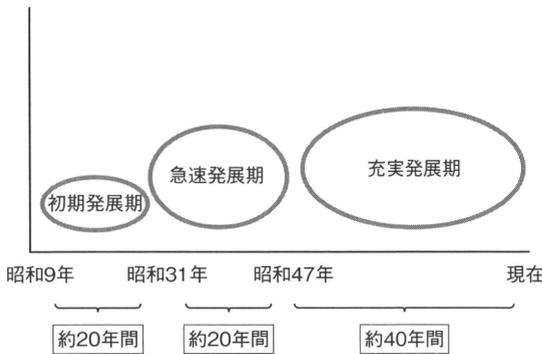
昭和三十七（一九六二）年に工学部が増設され、昭和三十年代に五つの学部体制が構築されたことになる。昭和四十年代に入ると、昭和四十四（一九六九）年に人文学部と体育学部（のちにスポーツ科学部と改称）が、また昭和四十五（一九七〇）年には理学部、さらに昭和四十七（一九七二）年には医学部が増設され、計九つの学部体制ができあがった。昭和四十八（一九七三）年には福岡大病院も開設された。この二十年間に及ぶ拡張政策によって、本学は地域社会の中で総合大学としての地歩を確立することになった。

以上、昭和三十〜四十年代の二十年間を「急速発展期」として位置づけることにする。

### （三） 充実発展期

本学の九学部体制は、九番目の医学部創設から約四十年間不変のまま維持されてきた。しかし、九学部体制という枠組みの中で、今日まで、学科の新設（人文学部には歴史学科、日本語日本文学科、東アジア地域言語学科、教育・臨床心理学、理学部に地球圏科学科、商学部経営学科、薬学部六年制の薬学科、医学部に看護学科など）及び大学院の設置（各研究科に修士課程、博士課程の増設）が行われた。平成十六（二〇〇四）年には、本学で十番目の大学院である法科大学院が創設された。また、昭和六十（一九八五）年には福岡大学筑紫病院の開設が、さらに平成八（一九九六）年には附属大濠中学校が設立、平成

図1 3つの発展段階



二十二（二〇一〇）年には附属若葉高等学校が設立されたのである。これまで一校であった附属高校が二校（附属大濠高等学校・中学校と附属若葉高等学校）となり、教育システムの基盤づくりが推進されたのである。この四十年間で多くの改善・改革が着実に進められたことも、本学の充実と発展の証左となるものである。

以上の昭和五十年代（正確には、昭和四十年代末）から今までの約四十年間を「充実発展期」として位置づける。

ところで本学は、平成二十一（二〇〇九）年に創立七十五周年を迎えたが、それを記念するため、さまざまな記念事業を行った。例えば、平成二十一年十月二十四日の七十五周年記念式典・祝賀会、十月二十三日の協定大學生長によるシンポジウム、著名人による連続講演会、ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム

わが大学史の一場面

「二十一世紀の創造」、学部などが企画する記念事業、施設整備事業（四つの建物の建築・福岡大学病院新診療棟、二号館、中央図書館、附属大濠中学校・高等学校本館及び体育館）、校友・地域と一体化した記念事業（高校生川柳コンクール、ふれあいスポーツフェスタなど）、七十五年史編纂など多岐に及んだ。

この一大イベントを通して、本学の地域的存在と貢献を学内外に発信することができた。特に七十五周年記念事業は、本学の未来を切り開く一大転機となり、改善・改革の起爆剤として作用したと言える。

さらに付言すれば、本学にとって歴史的な出来事となったのは、平成十七（二〇〇五）年二月に開通した地下鉄・七隈線である（福岡市には、すでに空港線と箱崎線が存在していた）。七隈線は、福岡市南西部の基幹的な動脈を形成し、「福大前駅」の設置も幸いして、本学にとって画期的なアクセス基盤となっているのである。

### 三 歴史的な特徴

——戦後の高度経済成長と本学発展との相似性

昭和三十（四十）年代の二十年間、日本は、世界でもまれにみる高度経済成長の時代（年平均一〇%の経済成長率）を経験する。この高度経済成長は、昭和四十八（一九七三）年の第一次オイルショックの勃発によって終息するまで続いたので

ある。

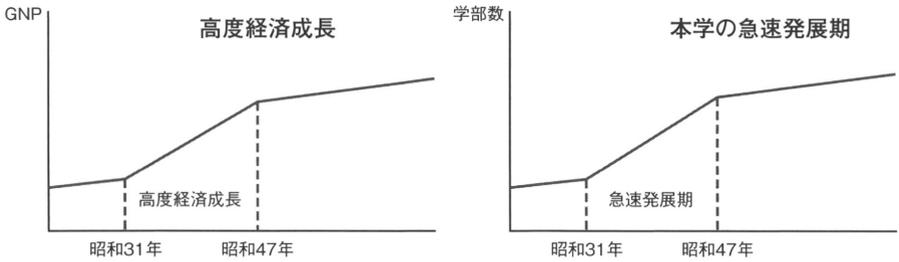
そこで、この二十年間のスパンの中に本学の歴史を挿入し重ねてみると、高度経済成長と本学発展の軌跡が重なっており、同じ急成長のベクトル軸を有していることが見てとれるのである（図2）。

まず、昭和三十一年という年は、日本経済にとっても、本学にとっても画期となる年であった。日本社会では、「もはや、戦後『ではない』とうたわれた年であり、本学では、「福岡大学」という新名称がつけられ、初めて複数の学部が誕生した年になるからである。その後約二十年間に及ぶ日本経済の高度経済成長と本学の急速発展期とは、急速な成長・発展という点で符合するところがあり、相似性あるいは相関性という特徴が見られるのである。

この戦後の二十年間で、日本経済の成長を示すメルクマールとしてのGNP（国民総生産。当時はこの指標が用いられていた。現在ではGDP国内総生産が用いられている）は急拡大をたどり、GNPの伸び率である経済成長率は年平均一〇%と高水準を実現し維持されたのである。本学もこの二十年間で、次々と新しい学部を創設し、拡大路線をとることによって九学部体制となり、「総合大学」としての基盤を築き、総合力と地域的存在感を得たことになる。

日本経済の急成長の軌跡と本学の急拡大という軌跡は、と

図2 高度経済成長及び本学の急速発展期のイメージ図



もに時を同じくして、類  
 似の並行的上昇曲線を描  
 いているのである。こう  
 して、戦後の二十年間と  
 いう歴史の一断面におい  
 て、日本経済と本学の両  
 者の歴史的な特徴が符合  
 し重なり合う、つまり、  
 「相似性」があると考え  
 ることができる。

#### 四 将来に向けて

最後に、若干の考えを  
 述べておきたい。

本学には、「思想堅実」  
 「穏健中正」「質実剛健」  
 「積極進取」の四本の柱  
 から成り立つ崇高な「建  
 学の精神」が存在する。  
 人として備えるべき理想  
 的な人物像を示したもの

で、本学はこの「建学の精神」に沿う人材を育成する責務を  
 負っている。そのため私は、本学を「アジアを見据えた地域  
 の総合教育拠点」として、すなわち、福岡、九州、アジアへ  
 と広がる輪の拠点として位置づけ、その輪を支える人材の育  
 成強化を図ることを重要な使命と考えている。

また、本学は福岡という地域の中で生きている組織体であ  
 り、地域密着型の大学である。ローカルな視点、ローカルな  
 行動力が基点でなければならぬと思う。もちろん、グロー  
 バルな視点、グローバルな行動力も必要であり、求められて  
 もいる。よって、特にアジアを視野に入れているところであ  
 る。地域を基盤とする本学を「地域マグネット・ユニバーシ  
 ティ」(Regional Magnet University)として位置づけ、「地域性」  
 と「拠点性」の強化に努めていきたい。

本学は、教育、研究、医療、地域連携の四つの機能の集積  
 拠点であるが、これらの機能を責任をもって遂行するととも  
 に、ソフト(制度、システム)とハード(施設・設備など)の  
 両面において改善・改革を推し進めていきたい。厳しい競争  
 環境下に置かれているが、内部努力と戦略によって環境適応  
 行動をとっていくことにする。その際の条件として、日本の  
 大学間の「公正な競争」と「共存共栄」が図れるよう願って  
 いる。

## ユニバーサルな博物館を 目指して

黒沢 浩 ●南山大学人文学部人類文化学科教授・人類学博物館運営委員会委員長

### ●人類学博物館の歩み

南山大学人類学博物館の誕生は、一九四九年に南山大学が創立したときまでさかのぼる。その同じ年に設置された南山大学附属人類学民族学研究所に併設された研究所陳列室が人類学博物館の原形となったのである。

それ以来今日まで、博物館では考古学、民族学、民俗学の資料収集を行い、その学術的価値は、内外の研究者から高く評価されてきた。しかし不思議なことに、この博物館は学外では有名なのに、学内の認知度は極めて低かったのである。

このような人類学博物館の状況を変えていくには、二つの選択肢があった。一つは、収蔵資料整理を優先し、今後博物館活動の基盤を整備しておくこと。もう一つは、普及活動に

重点を置き、博物館の認知度を上げることである。

選択したのは後者だったが、それによって人類学博物館の認知度をある程度上げることができたと思う。また、博物館講座や遺跡フィールドワークなどの一般向け事業が軌道に乗ってくるに従い、大学からも一定の評価を得られるようになってきた。そして今年、人類学博物館はリニューアルする。

### ●人類学博物館の目指すもの

これからの人類学博物館が目指すものについて、二つの点を紹介したい。

一つは、大学博物館としての役割である。大学博物館にとって大切なことは、研究によって収集された学術資料の保存と公開、そして活用を考えることであると思う。また、今日では大学の研究成果を文化資源ととらえて、広く社会の要請に応えていくことも求められている。

もう一つは、博物館はすべての人に開かれていなければならない、ということである。当然のように聞こえるかもしれないが、意外にも博物館という場には制約が多い。例えば、展示物に触れられなければ、視覚障害者は博物館へ行こうとは思わないだろう。これでは開かれていとは言えない。

このようにことを考えるきっかけとなったのは、自身が全盲

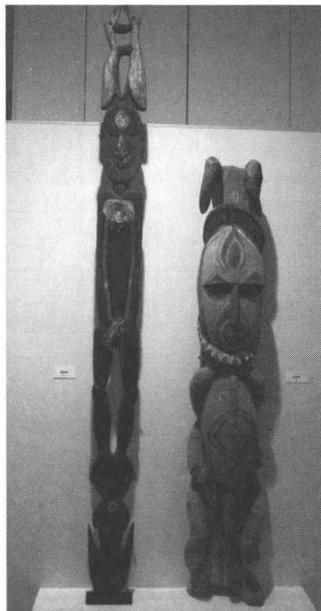


の研究者である国立民族学博物館の広瀬浩二郎氏が提唱する「ユニバーサル・ミュージアム」を知り、それをこれからの博物館のあるべき姿と感じたからである。このとき、大学における知の集積の場という性格と「すべての人に」という理念とが結びついた。こうして、新しい人類学博物館は、「すべての人の好奇心のための博物館」を目指すことになった。

#### ●今後の活動

現在、明治大学博物館との協定により、今年度以降も相互に資料を交換展示することを中心に、連携を進めていくことになっている。また、名古屋大学博物館との事業協定も現在協議中である。さらに、現在は

明治大学博物館に展示された  
バブアニューギニアの精霊像



名城大学附属高校との学習連携を行っているが、リニューアル後には南山学園の単位校との学習連携を深めていくべく準備を進めている。

このように、さまざまな連携を図るのには、おそらくこれからは一つの博物館が単独で何かを進めていくことは実質的にできなくなっていく、という認識があるからである。今日求められる知の枠組みは、すでに既存の学術領域との間にずれが生じ始めている。今後、大学博物館と公立博物館、歴史系博物館と自然史系博物館や美術館、博物館と学校など、さまざまな異種連携が実現していくに違いない。

最後に一つ付け加えたい。それは、ここで挙げたさまざまな博物館の実践に、つねに学生を巻き込んでいくことである。それはある意味で、今日の大学教育に求められている教育実践の一つだと思うからである。

## 来館者・学生に近い 博物館を目指して

手塚 覚夫 ●東海大学海洋科学博物館学芸員

東海大学は一九六二年にわが国で唯一の海洋学部を開設し、海洋に関する科学技術の教育研究の先鞭をつけた。東海大学海洋科学博物館は、東海大学海洋学部の教育研究に利用するとともに、海洋科学に関する知識を、広く一般の方々に楽しくわかりやすく、普及することを目的として、一九七〇年五月に開館した。水族館の要素と科学博物館の要素を併せもち、海洋に関する総合的な科学博物館として、海洋生物や海洋科学に関する事象を展示している。駿河湾に生息する海洋生物を中心に、約四百種六千点を飼育している。三メートル近いシロワニや大型のエイを飼育した海洋水槽。世界のクマノミ約三十種類のうち十八種を集めた「クマノミ水族館」では繁殖が繰り返され、卵保護する親魚や孵化した稚魚も来館者の方々が観察可能である。

資料収集・保管も重要な任務であり、開館以来収集した海

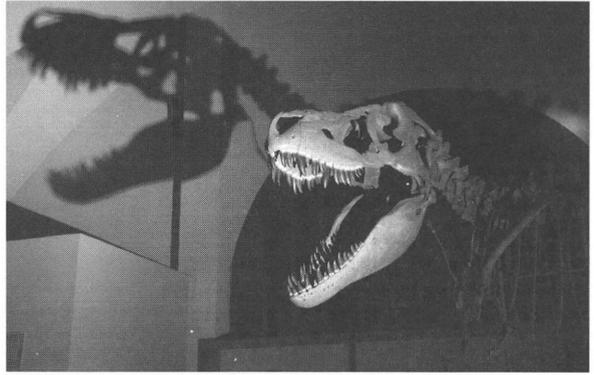
海洋科学博物館の大型海洋水槽



のもととなった世界で唯一の標本である。

東海大学自然史博物館は、一九八一年に恐竜全身骨格を中心に、生命の誕生から現在までの生物の歴史を展示し、学校教育を通じて自然の成り立ちを理解していただくことを目的に開館した。自然史博物館では恐竜や大型哺乳類の巨大骨格標本を多数展示。こちらも楽しくわかりやすく学ぶこと

洋生物標本は約一万四千点。えりすぐりの深海生物標本約百六十点を「駿河湾の深海生物」コーナーで展示。五メートルほどのリュウグウノツカイ・ベア（液浸標本）やラブカの卵育成段階の展示も貴重な逸品である。全長一八・六メートルのピグミーシロナガスクジラ全身骨格は新種として発見登録



ができる。また、海に関する化石も豊富で、魚類やカニ、エイなど変わった化石もあり、海洋科学博物館との対比がおもしろい。三階の恐竜ホールにある二十六メートルのディプロドクスやアジア最強の肉食恐竜タルボサウルスが大迫力！

東海大学海洋学部は海洋調査研修船望星丸（二一七四トン）を有し、海洋実習を実施している。

る。学生が乗船する海洋実習で世界で五個体目のマボロシクジラウオや日本初記録となるナンヨウフクメンイタチウオを採取し、東海大学海洋学部との共同研究を経て魚類学会で認められている。加えて来館者の方々にもご覧いただけるよう特別展示を行った。自然史博物館においても新たな化石を職員が発見し、学名に本人の名が残るなど多くの業績があり、貴重な資料を間近に見ることのできる博物館である。研究では生物などの飼育・採集・収集に関してそのノウハウが蓄積

され、展示に活用されている。また東海大学付属の特権を生かし、東海大学海洋学部の教授を筆頭に、大学キャンパス内では実施が困難である飼育・調査を、卒業研究として博物館敷地内にて行い、学生が日々生物や化石資料と向き合う。週末にはクマノミキッズというコーナーで海洋学部学生有志がボランティア活動を行い、来館者家族と楽しく海の生物について、遊びの中から海洋生物への興味関心を引き出すべく奮闘する。学芸員資格取得過程の実習でも大いに利用され、東海大学で学ぶ学生と来館者が交流する、まさに実際の博物館現場、生の来館者の声を体感できる理想的な実習の場である。博物館でさまざまな活動を行い、全国の博物館・水族館で活躍している学生は非常に多い。

駿河湾は日本で最も深い湾であり、海底が深く切り込む変化に富んだ構造である。また、黒潮暖流の分流が湾奥まで入り込む独特の場所と地形により多種多様な海洋生物が見られる。地質的に見ても日本平・久能山をはじめ特徴的なフィールドも多く、研究の場としては好条件がそろっている。このような立地に東海大学海洋科学博物館・自然史博物館は存在感を示し、今後も多く海洋や海洋生物、またその地形・地質に関して学ぶ、若い学生のすばらしい勉学の場となるであろう。

当博物館は、来館者の方々に海を、生物を知っていただき、つねに楽しんで学ぶことのできる博物館を目指して邁進していく。

# 博物館はおいしい

安田 清孝 ●東京農業大学「食と農」の博物館事務室長

## ●博物館で物産展？

● 昨今、デパートでの日常の風景となった感のある物産展。そう、日本全国の名物やおいしいものを一堂に集めて行われる一大イベントである。日本国内だけではなくフランスやイタリアなど、海外の物産展も消費者の楽しみになっていたりする。この物産展が「食と農」の博物館でもごく日常的に開催されているのである。

● 最初は「なぜ博物館で物産展？」と誰でも思う。しかも大学の博物館と聞いたらなおさら、「えっ？」と考え込んでしまいうだろう。しかし、当博物館の名前をもう一度読み返してほしい。「食と農」の博物館である。物産展も食と農に関する情報発信の一つなのだ。食の安全性や持続的な供給の保証が揺らぎかねない昨今、人々の大きな関心事であるその食に関して、具体的にかつ総合的に情報発信してくれる場がそれほどあるわけではない。わが「食と農」の博物館が目ざれるゆえんがそこにある。だから食と農に関することは、確か

東京農業大学「食と農」の博物館外観



● 全国の蔵元の約七割と言われる東京農業大学卒業生が経営する蔵元を対象にした展示スペース「蔵元紹介コーナー」がある。この展示スペースは、ともに年間の利用契約を結んでいる。そして契約企業や団体は、博物館一階のイベントコーナーを使用することができるのである。卒業生自慢の無農薬米や生で食べても甘いみずみずしいにんじん、地方自慢の新鮮な生産物や加工食品など、博物館はおいしいのである。

● 情報発信源からの確かでも有用な情報なら何でもあり、というスタンスがとれる。博物館一階には、東京農業大学の卒業生が経営する農場や農園、大学と地域連携協定を結ぶ地方自治体、各研究室と共同研究を行っている企業などが展示利用できる「コマーションボックス」がある。また二階には、日本

ちなみに二階の「蔵元紹介コーナー」は、「食と農」の博物館の名物コーナーになっている。色とりどりの二百八十本の酒瓶が壁面いっぱいになり並び、背後からライトアップされている様はまさにアートである。

### ●博物館スタンダード

もちろん、博物館のスタンダードたる展示も多種多様だ。平成十六年四月の開館以来、当博物館で企画した展示は平成二十五年六月の時点で六十五企画を数える。そのほとんどが各学科や関係諸機関からの企画である。この数は展示案内を作成した大企画展示に限るので、小スペースを利用して行なった小企画展示を加えるとさらに企画展示数は増える。

当博物館の目的とするところは、東京農業大学そのものの発信である。世田谷キャンパス三学部十学科、一短期大学四学科、厚木キャンパスの一学部三学科、オホーツクキャンパスの一学部四学科、さらに同一法人が千葉市に設置した東京情報大学も併せて丸ごと、過去・現在・未来を発信し続ける。

本年五月八日から国際キヌア年特別展示「アランダスからの贈り物」を開催している。今年のエボ・モラーレス・ポリビアマ多民族大統領により提唱され、国際食糧農業機関（FAO）が定めた「国際キヌア年」である。これは絶対に東京農業大学がやらなければならないものだ。この展示を見てくれたあるプロガーの感想がありがたかった。このように世界を対象にした展示も多く行ってきた。この五月に、ポルトガル農水環境国土計画省の食品及び農産物リサーチ担当副大臣と

駐日大使一行が見学を希望されてきたことは、「食と農」と冠した当博物館の面目躍如であった。

紙幅に限りがあるので紹介を急ごう。今年で四年目、年四回開催の馬事公苑とのコラボ企画の野外教室「馬事公苑ガイドウォーク・プロとみて歩く植物と馬」が人気だ。展示やイベントだけではなく、普段は展示をしていないが、三千六百点余りを数える古農具のコレクションは圧巻だ。東京農業大学の前身である大日本農会附属私立東京高等農学校校長でも

### カフェ プチ ラディッシュ



あった、日本の「博物館の父」といわれる田中芳男の意思を受け継いだ後進たちによって全国から蒐集されたもので、日本産業考古学会の産業遺産三百選にも選定されている。

最後に、博物館一階にある、ランチも提供する「カフェ プチ ラディッシュ」は、近隣に住む人々の格好の憩いの場となっている。味も含めてなかなか評判が良いのである。